



逢えてよかった。
浜美枝の
手づくり紀行

文化出版局

定価一〇〇〇円

昭和五八年三月一九日 第一刷発行
昭和五八年五月二七日 第三刷発行

浜美枝の手づくり紀行

逢えてよかった。

著者 浜 美枝

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三三二一／郵便番号一五二
電話 〇三三七〇一三一一（代表）

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社



もう一度逢いたいおばあちゃんたち。

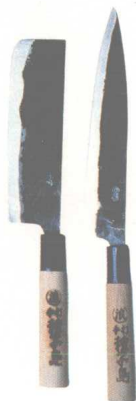
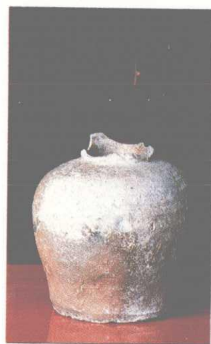


過去帳に女の名前は、ございませんわね。(福浦・腰巻き地藏にて)





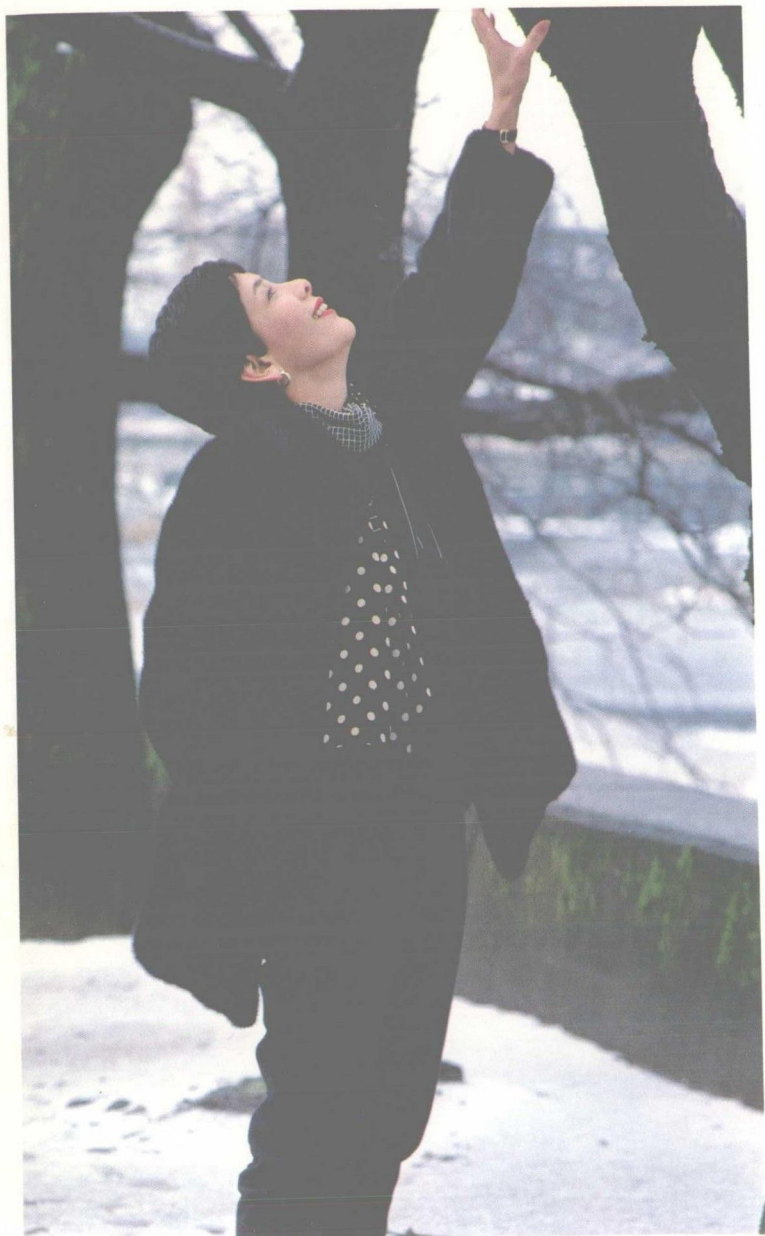
「手づくり旅情」…私にとって日本再発見でした。





逢えて、よかった。旅するたびに思います。





旅の空にあっても、私はいつも子どもと話せます。



すべての旅が、箱根のわが家につながります。



逢えて、よかった。

目次

まえがき——10

第一章 それは一人旅から始まった

旅立ちのとき——14

一日三、〇〇〇円のヨーロッパ——18

一七歳のひとり旅・旅のメモから——25

味を求めて三千里——28

北陸小浜の市場にて——29

中国のヨーグルト——31

北海道のシチューとチーズ——34

本当の野菜に逢う旅——37

ごはんが目がない——40

旅のミイハの楽しみ方——43

シヨーン・コネリ——43

オマー・シャリフ——46

ジャン・リュック・ゴダール——48

マーゴット・フォンテーン——50

シドニー・ポワティエ——52

第二章 子どもがいるから旅立てます

子連れの旅——56

私の仕事を見せる旅——60

パパとサバイバルツア——63

ビッグバカンスツア——66

時間のパッチワーク——69

女同士の旅——75

子育て主婦とグループで——77

子連れを逆利用——78

女同士がいちばん——80

友と旅するとき——81

旅上手になるために——84

旅先で美しく——84

私の旅の七つ道具——86

私の旅のこだわりポイント——93

第三章 手づくり旅情

取材を終えて——100

岩手・南部裂織り——106

浅草・羽子板——108

甲府・印伝	111
松本・松本民芸家具	114
木曾・お六櫛	119
伊豆・修禪寺彫	122
箱根・寄せ木細工	125
井川・メンパ	128
岐阜・和傘	131
古川・和ろうそく	134
越前大野・草染め木鉢	139
小浜・めのう細工	142
大津・草木染め組み紐	144
奈良・「古梅園」の墨	147
那智・那智黒硯	151
城崎・麦わら細工	154
倉敷・花むしろ	157
種子島・種子鋏	160
奄美大島・大島紬	163
沖縄・ガラス工芸	166

第四章 空間を求めて

もう一度逢いたいおばあちゃんたち	174
京都「たる源」のお母さん	174
生駒の名もないおばあちゃん	176
読谷村の糸巻きおばあちゃん	179
橋立のおばあちゃん	182
黄八丈のおばあちゃん	188
旅は数珠玉	192
美術商「近藤」との出会い	192
鏡台をめぐる不思議なご縁	197
水屋のひき合わせ	199
茶人・陶人・画人	203
逢えて、よかつた。	210
雪山さんとその家族	210
古川町の青年たち	213
金森千栄子大プロデュース	215
浜さんの旅によせて 永作火童	223
あとがき	226

まえがき

五十八年三月、私は土曜の朝八時からの毎日放送ワイド番組「八木治郎ショー・いい朝8時」から途中下車しました。このショーのなかで、追いつづけた「手づくり旅情」——日本の伝統工芸を訪ねて——は私の最も好きな枠であり、私の旅への想いのすべてをかけたものだったと自負しています。

お訪ねした家々、何軒になるでしょう。みつめさせていただいた手づくりする人々の手元、一体幾人になるでしょう。

私が旅というものの得もいわれぬ魅力にのめりこんで二〇年余。自分の足と目で探し歩いてきたものが、「日本の日本的なるもの」と気づいて以来、私はこの小さな島国日本に限りない愛着を持ちはじめていたのです。

その集大成ともいえるべき「手づくり旅情」ですから、私は女優という職業としてより本

当の自分の姿で立ち向かいました。

事前の資料収集から取材、フィルム編集までスタッフと共に、創る側の苦勞を共にし、毎週毎週、得がたい経験をさせてもらいました。本当は、もっともっと続けたい「手づくり旅情」だったのです。番組を下りることで、私はまた新しい時間を得ることができました。そして、また、旅に出るでしょう。今度の旅で、何がみつかるか。ともかく、再び私は旅に出ます。

いつかまた、テレビで私の旅を観ていただくチャンスがあるかもしれません。テレビ番組「手づくり旅情」の終了にあたって、私のいままでの旅のいろいろを書き綴ってみました。この本に書き記したどの旅も、いまだに私の記憶にみずみずしく残っているものばかり。ふとした瞬間に、忘れられない風景が、いま、目前にあるかのように目に浮かぶのです。ゴッホ美術館の階段の片隅に落ちていた午後の日差し、ストックホルムの氷の池をツイと進む小鳥たち。

金沢・大乗寺の暗やみの匂い。京都・祇園石段下から、古美術商「近藤」へ向かうときの、あの心せく思い。古川町の藤棚の下で青年たちとの交歓。さまざまな旅のシーンが鮮烈によみがえり、再び矢も楯もたまず、人恋しく、風景恋しく旅行鞆を引っ張り出す私

なのです。

大きなおなかをかかえての旅もありました。子育て中の忙しい日々、何とかやりくりをつけての小さな旅もありました。この本には、子育て中のママたちへの、ちょっとした旅の工夫の、私なりのアドバイスもこめたつもりです。

主婦の社会参加、などと声高に言わずとも、一人、そつと旅立つことで、充分すぎるほどの社会との接触がもてることを、私は知りました。家庭の女でいることは、また、より多くの社会とかかわり合えるチャンスであることも知りました。

小さな旅から大きな旅まで。お母さんの経験する旅は、子どもたちに、大きなおみやげをもたらします。

この本に精一杯つめこんだ、ママの旅日記を私の小さな四人の子どもたちに。
やがて、旅立つ四人の子たちに。

一九八三年 早春

浜 美枝

第二章 ●それは人旅から始まった

旅立ちのとき

私は昭和三十五年、中学を出てすぐ川崎市の東急バスに就職しました。

当時、中卒で就職することは珍しくなかったし、私の家は豊かでもなかったので、働いて自立することは当然のことと、私も考えていました。当時バスガールは破格の給料で、確か月給九、〇〇〇円だったと記憶しています。中学の行き帰り、いつも車庫の所で、すてきな制服でキビキビ働くバスガールのお姉さんたちに、大いに憧れていましたから、就職するならばガール、ときめておりました。

川崎市の武蔵小杉から横浜市港北区日吉間。東京の五反田方面へも勤務したことがあります。憧れの職業でしたから、私の張り切りようは大変でした。

働き、その報酬を手にする喜びは格別のものでした。先輩格のお姉さんたちや運転手さんたちはとても親切でしたし、仕事を覚えるのに夢中でした。勤務しながら見える、移り